

# 金融工学勉強会第 5 回

朝倉響

2024 年 7 月 26 日

## 前回の復習と今回の概要

- 前回 (2024 年 8 月 16 日)  
—
- 今回 (2024 年 8 月 23 日)  
—

## 5.4 資産価格評価の基本定理

表記

- $\mathbb{P}$ : 実確率測度
- $\mathcal{F}(t)$ : ブラウン運動に関連するフィルトレーション  
— 必ずしも「ブラウン運動から生成するフィルトレーション」とは限らない
- $\mathcal{F} = \mathcal{F}(T)$
- $W(t)$ :  $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$  上  $d$  次元ブラウン運動

### 5.4.1 ギルサノフの定理とマルチンゲールの表現定理

定理 5.4.1 (多次元ギルサノフの定理).  $\Theta(t)$ :  $d$  次元適合過程

$$Z(t) := \exp \left\{ - \int_0^t \Theta(u) \cdot dW(u) - \frac{1}{2} \int_0^t \|\Theta(u)\|^2 du \right\} \quad (5.4.1)$$
$$Z := Z(T)$$

$$\widetilde{W}(t) := W(t) + \int_0^t \Theta(u) du \quad (5.4.2)$$

$$\text{ただし } \mathbb{E} \int_0^T \|\Theta(u)\|^2 Z^2(u) du < \infty \quad (5.4.3)$$

とすると,  $\mathbb{E}Z = 1$  であつ, 確率測度  $\widetilde{\mathbb{P}}$

$$\widetilde{\mathbb{P}}(A) := \int_A Z(\omega) d\mathbb{P}(\omega), \quad A \in \mathcal{F}$$

に対し、 $\widetilde{W}(t)$  は  $\widetilde{\mathbb{P}}$  の下で  $d$  次元ブラウン運動.

**証明.**  $\widetilde{W}(t)$  は時刻 0 で値 0 を取り、連続な経路を持つマルチンゲール (マルチンゲールである証明の流れは 1 次元の場合と同様である\*1. ただし、多次元の計算が含まれることに注意). 2 次変分を考える.

$$\begin{aligned} d\widetilde{W}_i(t)d\widetilde{W}_j(t) &= (dW_i(t) + \Theta_i(t)dt)(dW_j(t) + \Theta_j(t)dt) \\ &= dW_i(t)dW_j(t) = \begin{cases} dt & (i=j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases} \quad (W(t) \text{ は } d \text{ 次元ブラウン運動}) \end{aligned}$$

結果、レヴィの定理より  $\widetilde{W}(t)$  は  $\widetilde{\mathbb{P}}$  上  $d$  次元ブラウン運動. □

- $\mathbb{P}$  と  $\widetilde{\mathbb{P}}$  は同値\*2: 実確率測度  $\mathbb{P}$  とリスク中立確率測度  $\widetilde{\mathbb{P}}$  で何が起こり得るかは一致.
- $\widetilde{W}(t)$  の各成分は  $\mathbb{P}$  のもとで独立でないこともあるが、 $\widetilde{\mathbb{P}}$  のもとでは独立.

**定理 5.4.2** (多次元のマルチンゲール表現定理). 仮定

- $\mathcal{F}(t)$ :  $d$  次元ブラウン運動  $W(t)$  から生成されるフィルトレーション (より強い仮定)
- $M(t)$ :  $\mathcal{F}(t)$  に関するマルチンゲール

このとき、 $d$  次元適合仮定  $\Gamma(t)$  が存在して

$$M(t) = M(0) + \int_0^t \Gamma(u) \cdot dW(u). \quad (5.4.4)$$

さらに、定理 5.4.1 の仮定が成り立ち、 $\widetilde{M}(t)$  が  $\widetilde{\mathbb{P}}$ -マルチンゲールとすると、 $\widetilde{\Gamma}(t)$  が存在して

$$M(t) = M(0) + \int_0^t \widetilde{\Gamma}(u) \cdot d\widetilde{W}(u). \quad (5.4.5)$$

**証明.** (証明は省略) □

## 5.4.2 多次元市場モデル

$m$  種類株式

$$dS_i(t) = \alpha_i(t)S_i(t)dt + \sum_{j=1}^d \sigma_{ij}(t)S_j(t)dW_j(t), \quad i = 1, \dots, m \quad (5.4.6)$$

期待収益率ベクトル:  $(\alpha_i(t))_{i=1, \dots, m}$   
ボラティリティ行列:  $(\sigma_{ij}(t))_{i=1, \dots, m; j=1, \dots, d}$  } 適合過程

ここから調べたいこと

\*1  $Z(t)$  がラドン-ニコディム過程であること、 $\widetilde{W}(t)Z(t)$  がマルチンゲールなことを示し、補題 5.2.2 を使う

\*2 一般の測度変換は  $\widetilde{\mathbb{P}} \ll \mathbb{P}$  だが、いま  $Z$  はほとんど確実に正であり、 $\widetilde{\mathbb{P}}(B) = 0$  なる  $B$  に対し

$$\mathbb{P}(B) = \mathbb{E}\mathbb{I}_B = \widetilde{\mathbb{E}} \left[ \frac{\mathbb{I}_B}{Z} \right] = 0$$

より  $\widetilde{\mathbb{P}} \gg \mathbb{P}$ .

- $S_i(t)$  のボラティリティ
- $S_i$  と  $S_k$  の相関
- 多次元市場モデルでのリスク中立測度が存在する必要十分条件
  - リスク中立測度が存在すると何が嬉しいか
  - このリスク中立測度は一意か

### $S_i$ のボラティリティ

以下を定義する

$$\begin{aligned}\sigma_i(t) &= \sqrt{\sum_{j=1}^d \sigma_{ij}^2(t)} \\ B_i(t) &= \sum_{j=1}^d \int_0^t \frac{\sigma_{ij}(t)}{\sigma_i(t)} dW_j(t) \\ &\text{連続なマルチンゲール} \\ dB_i(t)dB_i(t) &= \sum_{j=1}^d \frac{\sigma_{ij}^2(t)}{\sigma_i^2(t)} dW_j(t)dt = dt\end{aligned}\tag{5.4.7}$$

このとき,  $B_i(t)$  は (1 次元) レヴィの定理よりブラウン運動.

$$dS_i(t) = \alpha_i(t)S_i(t)dt + \sigma_i(t)S_i(t)dB_i(t)\tag{5.4.8}$$

$S_i(t)$  のボラティリティは  $\sigma_i(t)$ .

### $S_i$ と $S_k$ の相関

$$\begin{aligned}dS_i(t)dS_k(t) &= \sigma_i(t)\sigma_k(t)S_i(t)S_k(t)dB_i(t)dB_k(t) \\ &= \sigma_i(t)\sigma_k(t)S_i(t)S_k(t) \underbrace{\sum_{j=1}^d \frac{\sigma_{ij}(t)\sigma_{kj}(t)}{\sigma_i(t)\sigma_k(t)}}_{=:\rho_{ij}(t)} dt \\ &= \rho_{ik}(t)\sigma_i(t)\sigma_k(t)S_i(t)S_k(t)dt\end{aligned}\tag{5.4.13}$$

- $\sigma_i(t)$ :  $S_i$  の時刻  $t$  での相対変化の瞬間的標準偏差
- $\rho_{ik}(t)$ :  $S_i$  と  $S_k$  の相対変化の瞬間的な相関

### 5.4.3 リスク中立測度の存在

**定義 5.4.3** (リスク中立). 条件

- $\tilde{\mathbb{P}}$  と  $\mathbb{P}$  が同値
- 割り引かれた株価  $D(t)S_i(t)$  が  $\tilde{\mathbb{P}}$  の下でマルチンゲール ( $\forall i = 1, \dots, m$ )

を満たす確率測度  $\tilde{\mathbb{P}}$  : リスク中立確率測度.

割り引かれた株価過程

- $R(t)$  : 金利過程 (適合過程)
- $D(t) = e^{-\int_0^t R(u) du}$  : 割引過程
- $D(t)S_i(t)$  : 割り引かれた株価

$$\begin{aligned} d(D(t)S_i(t)) &= D(t)dS_i(t) + S_i(t)dD(t) + dS_i(t)dD(t) \\ &= D(t)(\alpha_i(t)S_i(t)dt + \sigma_i(t)S_i(t)dB_i(t)) - S_i(t)R(t)D(t)dt \\ &= D(t)S_i(t)[(\alpha_i(t) - R(t))dt + \sigma_i(t)dB_i(t)] \end{aligned} \quad (5.4.15)$$

【リスク中立確率測度を探したい】

- 以下を満たす市場価格過程  $\Theta_j(t)$  があれば

$$d(D(t)S_i(t)) = D(t)S_i(t) \sum_{j=1}^d \sigma_{ij}(t)[\Theta_j(t)dt + dW_j(t)] \quad (5.4.16)$$

- 多次元ギルサノフの定理から, 同値な確率測度  $\tilde{\mathbb{P}}$  を構築でき,  $\tilde{\mathbb{P}}$  のもとでのブラウン運動  $\tilde{W}(t)$  で

$$d(D(t)S_i(t)) = D(t)S_i(t) \sum_{j=1}^d \sigma_{ij}(t) d\tilde{W}_j(t) \quad (5.4.17)$$

を満たすものが存在する.

- $\tilde{\mathbb{P}}$  のもとで  $D(t)S_i(t)$  がマルチンゲールになったので,  $\tilde{\mathbb{P}}$  がリスク中立測度

結局, (??) を満たす  $\Theta_j(t)$  が存在すればリスク中立確率測度が存在する. (??) と見比べれば, 解くべき方程式は

$$\alpha_i(t) - R(t) = \sum_{j=1}^d \sigma_{ij}(t)\Theta_j(t), \quad i = 1, \dots, m \quad (5.4.18)$$

という  $d$  変数 (過程),  $m$  次元方程式